2022年10月16日付 愛媛新聞

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑫⑦

文化

石手川橋口大橋絵図

架け替え 耐久性を重視

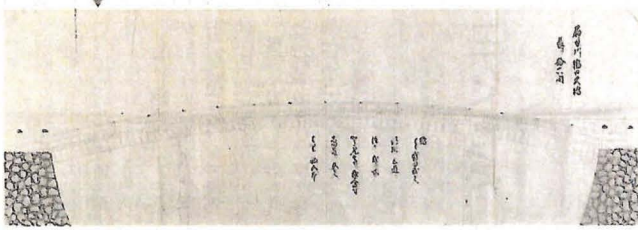
立花橋は石手川に架かる橋で、現在の橋は1928（昭和3）年に建設された鉄製のトラス橋である。南から松山の中心部に向かう入り口に位置するため、多くの自動車、自転車、歩行者が行き交う。

江戸時代においても、高知と松山を結ぶ土佐街道の松山城下への入り口に当たり、交通の要衝であった。軍事的な理由から立花口にはしばらく橋はなかったが、浄瑠璃寺の住職も務めた堯音（ぎょうおん）の発願により1819（文政2）年に初めて架橋されている。土佐街道を通じた物資の輸送や人の往来の増大に対応したものであろう。堯音が架けた橋は、絵図による記録「松山叢談」は、「周防岩国算盤（そろばん）橋の写なり」と記す。つまり、堯音は大工の檜垣卯兵衛を周防岩国の錦帯橋に派遣、その構造を学ばせた上で造りその姿がわかるが、橋脚をもたない木造のアーチ橋になっている。その点について、松山藩に関する編年史料にも、「石手川橋口大橋」と記された絵図が2枚ある。年代は不明なものの、架け替えられた2代目の橋の絵図と思われる。そのうち写真を掲載した1枚は橋の側面を舾板（しとみいた）で覆った完成図に松山藩の普請方が管理していた史料にも、「石手川橋口大橋」と記された絵図が2枚ある。年代は不明なものの、架け替えられた2代目の橋の絵図と思われる。そのうち写真を掲載した1枚は橋の側面を舾板（しとみいた）で覆った完成図に当たるもの、もう1枚は舾板を外して内部の構造が見えるようにしている。これらの絵図によると、2代目の橋は初代とは異なり、刎橋（はねばし）と呼ばれるもので、主桁（しゅげた）の一端を石垣に埋め込み、両側から突き出したこの桁を台にして、この上にさらに水平な桁を架け渡す構造になっている。また、2代目には、橋脚となる2基の3本建ての橋杭（はしぐい）も設けられている。初代よりも耐久性を重視したつくりへと変化している。

そして、1875（明治8）年には2代目の橋が大破、その翌年にお雇い外国人であるオランダ人技術者チッセンの設計により、3代目が完成している。歴代の絵図が遺（のこ）されていることで、松山城下の入り口にあった橋の変遷をたどることができる。その時々の技術の粋が詰まった橋の姿は、どれも個性的で美しい。

（学芸課長・井上淳）

〈随時掲載します〉



石手川橋口大橋絵図。個人蔵、県歴史文化博物館保管。特別展「浄土寺・浄瑠璃寺と写し霊場」で11月27日まで展示中

掲載許可番号：d20230301-04